

# 指導資料

 鹿児島県総合教育センター

## 幼児教育 第17号

- 幼稚園，小学校，特別支援学校対象 -  
平成26年10月発行

### 言葉による「伝え合い」を育む教師の関わり

近年，子供のコミュニケーション能力の低下が問題視され，幼児教育においても言葉による「伝え合い」の力を育てることが課題になっている。言葉による「伝え合い」ができるようになることは，小学校以降の，言葉を媒介とした教室での学びや思考活動の基礎を培うことにつながるとともに，友達との関係をつないでいく力ともなってくるものである。これらのことを踏まえ，現行の幼稚園教育要領においては，下記のように，領域「言葉」において，言葉による「伝え合い」ができるようにすることが重要なポイントとして示されている。

幼稚園教育要領 第2章ねらい及び内容

〔言葉 2 内容〕

- (1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心を持ち，親しみをもって聞いたり，話したりする。
- (2) したり，見たり，聞いたり，感じたり，考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
- (3) したいこと，してほしいことを言葉で表現したり，分からないことを尋ねたりする。

〔言葉 3 内容の取扱い〕

- (2) 幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに，教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき，言葉による伝え合いができるようにすること。

そこで，本稿では，幼稚園において，言葉による「伝え合い」ができるようになるための教師の関わり方や具体的な実践例を示す。

#### 1 幼児期の言葉の育ち

高濱(2007)は，「人間が言語獲得装置のような生得的基盤をもつとしても，そこにスイッチを入れるような人物の存在が不可欠であり，さらに対人的な関わりの中で言語を獲得していくことが重要である。」と述べている。幼児は，身近な人との関わりの中で，自分自身を表すこと，表出したことを受け止めてもらって満足すること，他者が表すことに関心を向けること，注意深く聞くこと，他者と共感することなどを通して言葉を獲得している。

幼稚園教育要領においても，「言葉は，身近な人に親しみをもって接し，自分の感情や意志などを伝え，それに相手が応答し，その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して，幼児が教師や他の幼児とかかわることにより心を動かすような体験をし，言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。」と示している。そこで，幼児期の言葉の指導においては，言葉をどのように使うのか，いかに語彙を増やしていくのかよりも，幼児同士，幼児と教師等，人との関わりの中で，体験

を通して、話したい・表現したい「思い」を育てることが重要であるといえる。

## 2 言葉による「伝え合い」を育む

### (1) 言葉による「伝え合い」ができるようになるとは

幼児は、幼稚園生活を楽しいと感じられるようになると、自分の気持ちや思いを自然に教師や友達に言葉や表情などで伝えられるようになり、友達との生活の中で自分の思いを言葉にすることの楽しさを感じ始めるようになる。そして、教師や友達が話を聞いてくれることによって、言葉でのやり取りの楽しさを感じるようになる。また、やり取りを通して相手の話を聞いて理解したり共感したりして、言葉による伝え合いができるようになっていく。

そのような中で、時には、自分の言ったことが相手に通じず、言葉で伝えることの難しさやもどかしさを体験することもある。そのような場合、幼児は、教師が適切な援助をすることにより状況に応じた伝え方を学んだり、周囲の人々の会話の仕方や話し方を聞きながら、相手により分かるように話し方を変えていくことを学んだりしていく。

このような体験を繰り返す中で、自分の話や思いが相手に伝わり、また、相手の話や思いが分かる楽しさや喜びを感じ、次第に伝え合うことができるようになっていく。

### (2) 「聞く」ことの重要性

幼稚園と小学校の連絡会等で、しばし

ば「幼児期に人の話を聞けるように指導してほしい」といった意見（いわゆる「小1プロブレム」への対応）が出されることがある。一般的に、人は、「自分に話し掛けられている。」と感じると人の話を聞こうとするものである。そのため、教師は、「あなたたちに話し掛けている。」という姿勢をもって幼児集団に話すことが大切である。

併せて、幼稚園では、友達の発表を聞いて考えたことを話したり、分からないことを質問させたりするなど、「聞く・話す・伝える」が絡み合う指導が中心であり、その経験を十分に積ませることが大切である。

### (3) 言葉による「伝え合い」ができるようになるための教師の関わり

幼児が言葉による「伝え合い」ができるようになるために、教師は、心を傾けて幼児の話やその背後にある思いを聞き取り、友達同士で自由に話せる環境を構成したり、幼児同士の心の交流が図られるように工夫したりすることが大切である。そうすることで、幼児の伝えたいという思いや相手の話を理解したいという気持ちを育てることが可能になる。

また、話が伝わり合うように、状況に応じて教師が仲立ちをしたり言葉を付け加えたりして援助することも大切である。

以下、幼児の言葉による「伝え合い」の姿と教師の関わり方を、岩田（2014）を参考に、発達の段階別にまとめたものを示す。

表 幼児の言葉による「伝え合い」の姿と教師の関わり

	年少のころ	年中のころ	年長のころ
幼児の姿	<p>新しい環境に慣れ、教師との信頼関係が築かれると、心の安定が見られるようになり、友達と教師のやり取りをまねて教師に話し掛けてくる。</p> <p>言葉で表すことは難しい場合が多く、表情や動作などを交えて精一杯伝えることもある。</p> <p>3才後半に見られる幼児同士の会話は、単純な言葉の繰り返しであったり、それぞれが自分の言いたいことを勝手に言ったりするだけで、伝え合うことは難しい。</p>	<p>幼児同士で会話的なやり取りができるようになり、お互いの要求や思いを伝え合い、仲間とイメージを共有しながら遊ぶことができる。</p> <p>友達との衝突や感情的な対立が多くなっていくが、自分たちでいざこざを解決していくだけの伝え合う言葉の力は、十分ではない。</p> 	<p>いざこざが生じてても、自分たちで話し合って解決していけるようになり、やがて、自分の中で言葉を重ねながら考えていく、いわゆる自己内の対話による思考の芽生えが育まれていく。</p> <p>友達と言葉を重ね合いながら物事決めたり、みんなでアイデアを出し合い、共通する目的の実現に向かって協同して遊んだりする。それらを通して、相手に分かるように「話す」、相手の話すことをしっかり「聞く」といった言葉の力が、更に育ってくる。</p>
教師の関わり	<p>「いや」、「だめ」などの言葉を出せる<b>雰囲気をつくる</b>。</p> <p>言いたいことを伝えようとする幼児のそれぞれの言葉に<b>耳を傾け、言葉を返す</b>。</p> <p>個別的な言葉や遊びをつないでいく<b>中継者としての役割</b>を担う。</p>	<p>いざこざが起きたときは、当事者に経緯を尋ね、双方の気持ちを受容しつつ、それらを翻訳者のように伝え合いながら、どのようにしたら仲直りして一緒に遊べるか、といった<b>介入的な調整の役割</b>を担う。</p>	<p>幼児の自立・自発的な言葉のやりとりを<b>見守り</b>、それを<b>促し</b>、ときに<b>方向付けるといった司会者としての役割</b>を担う。</p> 

(4) 言葉にできない思いを受け止める

幼児の言葉の育ちには、周りの言語環境や個々のもっている成長の速さが大きく影響しているため、幼児期における言葉の育ちは一人一人異なり、その違いは大きい。この時期は、自分の思いをなかなか相手に伝えられず、いらいらして攻撃的な行動に出たり、その反対に伝わらないことが不安となり、友達に関わる事が少なくなったりする幼児も見られる。こうした幼児に、言葉で表現することを急がせるとかえって表現できなくなることもあることから、教師は、幼児の思いを受け止めて、それを言葉で伝えるやりとりを見せることが大切である。そのようなやりとりを繰り返すことで、うまく表現できなかった幼児も次第に自分の言葉で伝えられるようになっていく。

3 教師の関わりの実践例

ここでは、前述までの内容を踏まえた教師の関わりの実践例を示す。

(1) 年少児に対する関わりの実践例

A児 (教師に、小声で) ぼくも運転したい。  
 教師 Bくん、Aくんも運転手になりたいんだって。  
 B児 けがした人は、ぼくが運ぶんだよ。  
 教師 Aくんは下に乗りたいの？  
 A児 (首を振る)  
 教師 Aくんはけがしたところじゃなくて、上に乗りたいたんだよ。Aくんも運転のところがいい？  
 A児 うん。  
 B児 じゃあ、ちょっと待っててね。  
 教師 ありがとう、Bくん。Aくん、よかったね、交代してくれるんだって。  
 ~しばらくして、ブランコの近くにいた教師のところにB児がやってくる。~  
 B児 運転、代わったよ。  
 教師 Aくんに代わってくれたの？ありがとうね。

この事例では、教師が両者の話をじっくり聞き、お互いの気持ちを整理することで、教師と一緒に相手に自分の気持ちを伝えることができるように援助している。また、A児に交代したことを認めて

ほしいというB児の思いを受け止めた言葉掛けをしている。

(2) 幼児に対する教師の関わりの実践例 【これってたまごかな？】

下記の実践は、幼児が主体的に環境に関わり、気付いたり、発見したりしようとする姿を大切にしながら、自分の発見を他の友達に知ってもらい、友達から新しいアイデアが付け加えられ、遊びが広がるといった、伝え合う喜びを実感できるような教師の関わりの例である。

A児、B児、C児は年長児、D児、E児は年中児

幼児の姿・言葉	教師の関わり
<p>幼児が木の実を見つけてくる。            A児 「これ、かぼちゃだよ。」            B児 「ぼくね、割ってみたらね、くりみたいな色だったんだよ。」            年中の友達が集まってくる。            D児 「あっ、たまごだ。」            C児 「これ、たまごじゃないよ。」            A児 「これね、豆だよ。」            E児 「たまごだよ。だってこんな色してるもん。(たまごのような模様が入っている。)」  <b>教師 「ほし組さんが、『たまごだよ。』って言っていたけど、違うの？」</b>  <u>～伝え合いを促す関わり</u></p>	<p>幼児が環境に対して興味をもって積極的に関わろうとする姿を見守る。</p> <p>どう言ったらたまごじゃないって分かってもらえるかなあ・・・。</p> <p>どうしたら年下の友達にたまごでないことを知ってもらえるか、自分たちでアイデアを出し合う様子に寄り添いながら、<b>子供同士の架け橋となるような言葉掛けを行う。</b></p>
<p>B児 「割ってみたら？」            C児 「足で踏んでみたらいいんじゃない。」  <b>教師 「そうか。そんな方法があったね。」</b>  <u>～やりとりを見守る関わり</u></p>	<p>そうだ、かぼちゃのように割ったら中身が分かるかも・・・。</p>
<p>B児 「割ったら、ほら！」            A児 「おおっ！」  <b>教師 「ほし組さん、来て！割ったらこんなになってたんだって。」</b>            A児 「たまごじゃないでしょ？割れた、割れた！」            D児E児 「おおっ！」            A児 「足で踏んだら割れたよ。」            B児 「じゃあ、探しごっこしよう。」  <b>教師 「何を探すの？」</b>  <u>～伝え合いを方向付ける関わり</u></p>	<p>たまごじゃないって分かってもらえて、よかった！</p> 
<p>B児 「たまご(木の実)とキノコ。探検しよう！割れたのはここに入れて、ご飯にしようかな。」            C児 「キノコも割って、ご飯にしないかな。」            木の実やキノコを使って家族ごっこを始める。            B児 「四人家族ね。先生は、お母さんね。」  <b>教師 「はい、お母さんね。」</b>  <u>～やりとりを見守る関わり</u>            C児 「ぼくは9歳のお兄ちゃん。」</p>	<p>木の実をごっこ遊びに活かしたいという幼児の気持ちを大切に、<b>教師も遊びに加わる。</b>また、年下の友達ともつながりがもてるように招待するなど、<b>遊びが発展するよう援助する。</b></p>

(事例は鹿児島大学教育学部附属幼稚園の実践を基に作成)

言葉による「伝え合い」ができるようになるためには、幼児同士又は幼児と教師との間に、安心して言葉を交わせる雰囲気や関係が成立していることが大前提である。その上で、幼児が言葉による表現への意欲を高めていく保育環境を整え、教師が、幼児一人一人に応じた関わりをしていくこと

が大切である。

- 引用・参考文献 -
- 文部科学省 『幼稚園教育要領』平成20年
  - 文部科学省 『幼稚園教育要領解説』平成20年、フレーベル館
  - 無藤隆監修 『事例で学ぶ保育内容 領域 言葉』2007、萌文書林
  - 岩田純一著 『子どもの友だちづくりの世界』

(教職研修課)